(個人用)

メルロ=ポンティ研究

第　四　号

○知覚と言語が交わるところ ……長滝祥司（1）

○問いかけの思考から応答の思考へ

—ヴァルデンフェルスのメルロ=ポンティ論 ……田辺秋守（20）

○自然と制度 ……廣瀬浩司（35）

○偶然に揺れ動く目的論

—カント『判断力批判』の解釈をめぐって ……加國尚志（49）

○プラディーヌとメルロ=ポンティ

—邂逅と論争せざる哲学者たち

……フランソワ・エドシエック（大滝結訳）（65）

○ Pradines et Merleau- Ponty

— La rencontre des hommes et le non- débat des philosophies

……François HEIDSIECK（1）

1998 年 9 月

メルロ=ポンティ・サークル

Les études merleau-pontiennes

No. 4

The Dynamic Entanglement of Perception and Language

……NAGATAKI Shyoji（1）

Von fragendem Denken zu antwortendem Denken

— Waldenfels Auseinandersetzung mit Merleau- Ponty

……TANABE Shyuji（20）

Nature et Institution ……HIROSE Koji（35）

Téléologie tremblante de contingence

— Sur l'interprétation de Critique du Jugement de Kant

……KAKUNI Takashi（49）

Pradines et Merleau- Ponty

— La rencontre des hommes et le non- débat des philosophies

……François HEIDSIECK（traduction japonaise OTAKI Musubu）（65）

September 1998

Edited by

MERLEAU- PONTY CIRCLE

Tokyo Japan

(6) Vgl. *Ordnung im Zwielicht*, Suhrkamp, 1987. S.47.

(7) Vgl. AR, S.15.「序」に述べられているように、『応答の目録』は、直接には論文集『異者の刺』（*Der Stachel des Fremden*, Suhkamp,1990）所収のいくつかの論考の軌道の延長線上を進行している。

(8) Vgl. Antwort auf das Fremde. Grundzüge einer responsiven Phänomenologie, 1996, S.5.（日本講演草稿）

(9) Theodor W. Adorno, *Jargon der Eigentlichkeit*, Suhrkamp, 1964, S.27. アドルノの非難が正鵠を射ているかどうかは慎重に検討すべき問題である。しかしいずれにしろ、ハイデガー、ガダマーにおいて「問い」の優位が疑われることはなかったであろう。『応答の目録』において問いと答えの解釈学的循環について述べている節で、ヴァルデンフェルスは、一例として『形而上学入門』の次の件りがあらわれる箇所に注意を喚起している（AR 134, Anm. 61）。「問うとは知を―意志することである（Fragen ist Wissen-wollen）」（*Einführung in die Metaphysik*, Max Niemeyer, 1953, S.16）。ガダマーについては、『真理と方法』（*Wahrheit und Methode*, J.C.B.Mohr, 1965）第二部第二章第3節 c「解釈学的な問いの優位」を参照。

(10) デリダが『精神について―ハイデガーと問い』のなかで次のように記していることが注目される。「存在の呼びかけ、この呼びかけにいかなる問いもすでに応答してしまっており、言語活動が来るところ到るところで、すでに約束は起こってしまっているのだ。言語活動は常に、いかなる問い以前にも、そして問いそのものの内で、いくぶんかの約束へと帰着する。」（*De l'esprit, Heidegger et la question*, galilée, 1987, p.147. 邦訳（港道隆訳）人文書院刊一九九〇年、一五二頁）ヴァルデンフェルスは、この箇所「いかなる問い以前にも」に付された長大な註を参照するように促している（AR 193, Anm.1）。そこでは、ハイデガーの「問いの問い（question de la question）」がもはや問いではなくなる境位について詳細に論じられている。デリダによれば、言葉の約束（Versprechen）においては、問いは、どんな問いにも先だって必ず責任を負った（responsable）応答（réponse）である。

自然と制度

廣瀬浩司

本稿では、メルロ＝ポンティの自然の概念についての講義の読解を通して、後期メルロ＝ポンティの哲学の一側面に光を当てようと思う。ここでとくに問題にしたいのは、現代生物学の存在論的な意味を検討している一九五七年度以降の講義である。[1] この講義の問題点は、まず『行動の構造』を読み直すことによって、より明確になるだろう。そのうえで「制度化」概念との関係を意識しながら講義そのものを検討する。

一　『行動の構造』――自然と世界の制度化

前年に現代物理学の成果を検討した後にメルロ＝ポンティは「現代生物学の諸傾向」（NA, 187）の分析に着手する。現代生物学の成果に基づくならば、生という現象を説明するためには、唯物論と生気論、機械論と合目的論、全体と部分の二者択一に頼ることはできず、第三の領域を主題化しなければならない（NA, 196, 238, 267）。動物の行動の「構造」や「ゲシュタルト」、あるいは「生」という現象一般は、まさにこの第三の領域に位置づけられる。それは「物理的であると同時に意味」（NA, 200）であり、「実現する限りにおいておのれを隠すもの」（NA, 194）などと規定される両

義的な現象なのである。この二重の現象を、観念論のように理念性の次元に回収することなく分析し、存在論の変化をうながすものとして捉え返すこと、これがこの講義の第一の主題であると思われる。

これは彼の最初の著書『行動の構造』の主題と密接に結びついている。冒頭に明確に記されているように、この書の目的は「意識と自然の諸関係を理解すること」（SC, 131）であった。簡単にこの書の問題点を整理しておこう。

周知の通り、この書を読むさいにはメルロ＝ポンティが身を置いている「視点」がどこにあるかを考慮することが必要である。まず、この書の分析の第一段階においてメルロ＝ポンティは「外的な観察者（spectateur étranger）」の視点に身を置き、反省や言語によっては何も知らないかのように「装う」（feindre）（SC, 199）ことから始める。この偽装された素朴さによって、「行動」という概念が物理的・生物的・人間的次元の分析において有効であることが確認される。行動のゲシュタルトは、各次元において「意味の統一」を「表現し」（SC, 52-54, 111-113）ており、それが分析の客観性を保証するからである。

こうして「物理的」「生物的」「心的」という三つの次元は「三つの弁証法」として現れてくる。したがって冒頭の「偽装」は素朴なものにとどまることはできず、おのずから我々を超越論的態度に導いてゆく。あたかも行動の構造は、いわばその自然な運動によっておのれを統合してゆき、我々を人間的意識、それも正常で成人した人間の意識へと導くかのごときなのだ。そして「下位の弁証法」はこの意識に対する（pour）ものであり、「構造」の意味（signification）はこの意識に対してこそ純粋に「表現される」ことになる。したがって各次元の意味の統一はいわば意識の歴史の構成的な契機にすぎず、構成する意識にとっての理念であるかのように思われる（SC, 222）。

だが分析の第二段階においてメルロ＝ポンティはこの「批判主義的な」考えを転倒しようとする。真に重要なのは「意味」の概念ではなく「構造」の概念である。言い換えるならば、構造とは、超越論的な意識による「意味の統一」であるばかりではなく、「分かちがたい理念と実存の結合」「偶然的な配列」でもあって、それによって「素材は我々の前で意味を持ち始める」。それは「生まれつつある知解可能性（intelligibilité）」なのだ（SC, 223）。

この微妙な逆転によって『行動の構造』の叙述自体が螺旋状に取り上げ直されて奇妙な脱中心化をほどこされ、『知覚の現象学』につながるさまざまな問題系（知覚の射影性、地平性、沈殿）や用語（「生き生きとしたパロール」）が足早に導入されていくのだが（SC, 223-228）、この非常に密度の高い数頁に立ち入ることはできない。[2] その代わりに、批判主義との差異を明確に述べた次の一節を引用することで、問題点を確認したい。

> 批判主義は、自分の理念的分析の残滓（résidu）である質や実存を少しずつ抑圧し、ついにはそれを質料に据え付けてしまう。そこではひとは何も思考することはできないし、したがってあたかも質料は存在しないかのようになってしまう。このように批判主義は認識の初めから終わりまで、同質な悟性の活動を展開する。それにたいして［メルロ＝ポンティの立場からすれば］あらゆる形式化は、新たな弁証法の制度化（institution）、新たな現象の領域の開け（ouverture）として現れてくる。それは先行する構成の層を孤立した契機としては廃棄する（supprimer）が、それを保存し、統合もする新たな層の設立（établissement）にほかならない（SC, 224）。

ここではメルロ＝ポンティの現象学の重要な問題のいくつかが収斂している。カッシーラー、ブランシュヴィック、ラシエーズ＝レイなどに代表される当時の批判主義的観念論は、感覚的な質や形式化されない生の質料を、理念的な統一に回収できる限りで主題化するので、その偶然的な配列や発生などは超越論的な分析の「残滓」として扱われ、ついには認識論的な領域の外部に追放されてしまう。この認識論的な（エピステモロジック）主体の事後的な構成によって「同質な悟性の活動」が

保証され、連続した意識の歴史が語られることになる。むろんその歴史は一挙に与えられるものではなく、個体性が「少しずつ」統合されていく歴史なのではあるが、構成的意識の前では、「下位の弁証法」は権利上つねに上位のそれに統合されるべきものとしてのみ存在価値を持つのである。

それに対してメルロ＝ポンティの現象学の課題は、批判主義的な分析の「残滓」である生の素材をたんにそのまま復権することにあるのではなく、それを「理念の世界における出来事」としての形式化によって捉えかえすことにある。言い換えるならば、ゲシュタルトは「実存の偶然において発せられ、さらには作られる理念」（SC, 227）であり、意識の反省はつねに時間的・空間的特異性に結びつけられていなければならない。[3]

こう考えるならば、批判主義的な意識の同質性はいわば内側から解体されていくはずである。構成するものと構成されるものの間で、それを区別すると同時に結びつける場として、第三の次元が主題化される。それは、意識が新たな現象の領域の「開け」に遭遇する場であり、「下位」の弁証法が上位のそれにつねに「切迫」し、統合を本質的に「挫折」させる場なのだ。この二重性は「原理的に基礎づけられており」（SC, 227）、意識の歴史そのものに本質的にはらまれているが、反省哲学によっては主題化できない出来事に関係する。

『知覚の現象学』ではこの開け＝出来事＝制度化を Stiftung と呼ぶことになる。現象学的な意識が制度化するものは、理念的な対象などではなく、「すでに構成されてしまっている」と同時に「けっして完全には構成されてしまわない」「世界」である（PP, 517）。この「すでに」と「けっして完全には」の間において、現象学的な世界は「根元的な偶然性」ないしは「最初の設立ないしは基礎付け」である Stiftung として残り続ける（PP, 148）。要するにこの Stiftung こそ、意識の歴史性と理念性の共通の母胎なのであろう。

このように、すでに『行動の構造』の最終章においてメルロ＝ポンティは批判主義の意識の歴史を転倒しようとして

いた。より正確に言うならば、批判主義が事後的におこなう観念論的転倒を転倒し、それを「経験全体」（SC, 240）にまで押し広げ、反省する意識が到来するという出来事そのものを主題化しようとするのだ。彼はこの到来する意識を「世界にやってくる精神」（SC, 225）と呼ぶ。この精神が記述しなければならないのは理念的な統一ではなく、「我々の眼前における意識のスペクタクル」（SC, 225）であるという。意識はこのスペクタクルに巻き込まれ、それを受動性として経験しながら、世界と意味を「制度化」[4]するのだ。

以上でおわかりの通り、メルロ＝ポンティにとって「自然」の問題系は反省哲学や弁証法の内在的な批判に結びついており、けっして独断的に前提されるものではない。メルロ＝ポンティがつねに自然的・知覚的な予定調和に執着し、それが彼の思想の隠された欲望になっていた、というような解釈は、すでに『行動の構造』においても妥当しない。直接的な知覚意識の素朴な記述は、ひとたび批判主義によって乗り越えられる。メルロ＝ポンティの現象学の課題は、この乗り越えの運動と反省の到来そのものを主題化し、素朴的な記述とその反省の両者を含んだ「経験」全体を語ることにある（cf. SC, 200 et sq.）。

もちろんそれぞれの問題は十分に深められていないし、すべての問題を「知覚」の問題に集約させようとする作業はじゅうぶんに練り上げられてはいない。たしかにすでに『行動の構造』において、「知覚」とは「実存を認識させてくれる行為」（SC, 240）として広義に理解されなければならないことは述べられている。だが、その具体的な展開は『知覚の現象学』にゆだねられている。

しかし『知覚の現象学』への移行によって、物理的・生物的な次元は切り落とされてしまうのではないだろうか。知覚の「両義性」や「時間性」の分析は、『行動の構造』の自然の次元の分析を十分に取り込んでいるのだろうか。メルロ＝ポンティは知覚世界の両義性の記述に焦点をあててしまったために、その両義性そのものを成立させる Stiffung そ

のものは十分に主題化していないのではないだろうか。それによって自然的世界だけではなく、さらには言語や歴史の分析にも影を落とすことになってしまったのではないか。[5] すなわち「知覚的世界」の心理学的記述から始めるという『知覚の現象学』の方法は、自然的世界と人間的世界、あるいは知覚的世界と言語的・歴史的世界という階層構造を暗黙の内に想定するかのように理解されてしまうのではないか。五十年代半ば以後の制度化概念の導入、自然の概念の再検討は、まさに『行動の構造』と『知覚の現象学』の移行地点に立ち返り、おのれの思想の構造そのものを組み替える試みなのではないか。

二　「『何か』の哲学」と偏差の問題

以上のような問題が『知覚の現象学』においてどのように取り上げ直されているかを検討するかわりに、本稿では直接『自然』講義および『見えるものと見えないもの』における展開を検討することにしよう。

（1）「モノの哲学」から「『何か』の哲学」へ

まず注目したいのは、一九五七～一九五八年の講義におけるドリーシュの発生学、その新生気論的立場の検討である。この一連の講義全体にわたって言えることであるが、メルロ＝ポンティはこの時期には『行動の構造』より積極的に生気論的とも見える立場に身を置き、知覚より「低い」次元から批判主義的転倒の転倒を遂行しようとする。しかし最終的な問題はあくまで人間身体の到来地点を確認すること、すなわち「自然におけるその発生の地点において把握すること」（NA, 269）であり、さらには意識を「制度化」として、すなわち行動のひとつのタイプとして取り扱うことである

こと（NA, 220）は確認しておかなければなるまい。

さて、別のところで詳しく論じたことだが、[6] 生物の行動のゲシュタルトはあたかも有機体のごとくに動的に自己を組織し、環境を先取りするとともに未来のゲシュタルトを先取りしていくかのように記述される。それはあたかも質料＝物質それ自体がさまざまな可能性を貯蔵し、未来への関係を持っているかのようである。ドリーシュはこれを「前望的な潜勢力」（prospektive Potenz）と呼んでいた。だが発生の過程には一定の類型性も見られる。そこには「一種の秩序」があって、可能性は一定の規則によって配分されていなければならない。

メルロ＝ポンティの課題は、この発生の現象をたんに「諸可能性のカオス」と「秩序原理」の外的な結合として考えるのではなく、「可能性の複数性は類型（type）の普遍性の裏面にすぎない」こと、すなわち、これらが「二面性を備えたひとつの現象の裏表」であることを示すことにある（NA, 295）。たとえば受精卵の発生の過程を「調節」する外的な秩序原理や「超空間的な（メタ）」理念を想定することはできない。非空間的なものはその都度ミクロな現象に結びつけられ、非決定性の領域をはらんだ隣接関係による誘導によって実現されていくからだ。

だがドリーシュはゲシュタルトのような概念を持たなかったため、これをいわゆるエンテレキーとして肯定的に定立し、哲学的には後退してしまう。メルロ＝ポンティの課題は、ドリーシュのエンテレキー概念の哲学的な地位を確定することによって、「即自の存在論」を疑問に付すことにある。

この視点からメルロ＝ポンティは、即自的な空間しか認めない「モノの哲学（la philosophie de la chose）」（古典的な生気論と機械論）と、非空間的な理念性を仮定してそれがなんらかの精神によって担われていると考える「観念の哲学」を両断的に乗り越える立場として、「『何か』の哲学（la philosophie du « quelque chose »）」を提唱している。「『何か』の哲学」とは、「無ではなく何かがある」という単純な事態から出発する（NA, 302）。『見えるものと見えないもの』の

「補遺」として採録されているテキストでも述べられているように、それは「無を地として経験を思考すること」の批判として提示されている。すなわち、事物の現前を「非存在の仮定（l'hypothèse d'inexistence）」（VI, 215）の試練にかけることによって、その可能性の条件や客観性、自己同一性を定立しようとする観念論的哲学を批判し、反省するものと反省されるものの間に、非反省的な「『何か』への開け」を確保しようとする哲学なのである。それではこの「『何か』への開け」はどのように記述されなければならないのだろうか。

（2）構造の蝶番としての偏差

注目すべきことに、メルロ＝ポンティはこの「『何か』の哲学」を「構造の哲学」と等置している（RC, 173）。このことはどう理解すればよいのだろうか。

まず『見えるものと見えないもの』における「肉」概念の定義に注目しておきたい。彼によれば、肉とは「ひとつの事実や事実の総和ではないが、『場』や『今』に癒着するものであり」「『どこ』と『いつ』の開設」であり、さらには「それらが意味を持つようにするもの」「細分化された事実が『何か』のまわりに配置されるようにするもの」なのだ、と（VI, 184）。言い換えるならば、『何か』とは、ある構造が創設されるに際して、その「蝶番」（VI, 194, 301）となり、相対的に安定した構造の意味を創設するものであるといえよう。ただしこの『何か』への開けは、直観によって合一すべき全体性への開けではなく、つねに空間的・時間的に限定された「偏差」として与えられる。とは言え偏差とは、弁証法的に乗り越えられるべき純粋な否定性やたんなる対立でもなく、むしろ「差異の体系」としての構造に「主体」が内的に接合する場のことである。「偏差がなかったとしたら事物や過去の経験はゼロになってしまうが、この偏差こそが事物そのものへの開けなのだ」（VI, 166）。それではこの偏差は構造とどのような関係を持つのだろうか。

一方では、偏差とは構造的なものに還元されない出来事的な意味の根拠に関係する。メルロ＝ポンティはこれを存在論的な差異にたとえている（NA, 304）。偏差とは、既成の構造にたいして存在論的な差異によって区別されるものであり、構造の諸要素が「意味を持つようにするもの」である。

だが他方では、この偏差は、おのれに本質的な運動によって、みずからの働きを覆い隠してしまう。メルロ＝ポンティが別の文脈で述べているように「最初の開けは隠蔽が可能であることを排除しない」（VI, 49）どころか、おそらくおのれの隠蔽をその本質的な契機としてはらんでいるのだ。

ある偏差が現れるとき、それはすでに構成された構造の規範＝水準に対する偏差として現れる。そしてこの局所的な偏差は、構造の潜在的な可能性の現れとして、局所的な分化を引き起こす。だがこの分化は同時に新たな構造化への呼びかけでもあり、新たな制度は、この偏差を蝶番として創設されることになる。要するに偏差とは、構造における差異の原理であると同時に、新たな統合の可能性を基礎づけるものでもある。それは局所的な分化と暫定的な統合、予測不可能な出来事と持続的な構造のパラドクサルな接合体なのだ。別のところでメルロ＝ポンティが述べているように、「何か（Etwas）」を軸に成立するゲシュタルトは、たんなる時空間的な個体ではなく「時間と空間を跨ぎ越す布置に今にもみずから統合されようとする」（VI, 258）ものである。しかし反対にこの布置のほうは超空間的なものでなく、ある時空間に癒着している。このようにメルロ＝ポンティは、顕在的な個体と超越的な理念の「間」の時空間において、構造化ないしは「個体化の作用」[7]を暴き出していく。これは個体と理念、出来事と構造の共通の母胎として、意味の根拠でありながら、つねに構造の中において隠されていくような、分裂し散逸していく根拠なのである。

そして、構成する主体にとってかわるべき「制度化する主体」とは、まさにこの特異点に到来するべきものであろう。この主体は偏差という特異点を媒介に構造に内側から参入し、分化と統合、出来事の現れと構造化のパラドクサルな

「縫合（suture）」（NA, 292, 317）の渦に巻き込まれ、出来事を受動的にこうむりながら、しかるべき行為の形を発明する。それによって主体はおのれの活動の領野の規範をみずから創設していく。[8]このことをメルロ＝ポンティは別の文脈で「有機体自身が制度化する不安定性」（VI, 284）とも呼んでいる。制度化する主体は偏差としての出来事に内側から立ち会うからこそ、おのれの行動規範をみずから創設することができるのである。[9]

メルロ＝ポンティが晩年に至るまで「知覚」と呼び続けていたものは、すでに制度化された規範に対する偏差を標定（repérage）し、見分ける（discerner）ことによって、直観による合一を介することなく、世界を制度化する行為をさすものであると考えることができるのではあるまいか。[10]だが本稿ではこの問題に深く立ち入ることはせず、『行動の構造』について前節で提起した問題に戻ろう。

（3）諸布置の建築物と存在論

理念的構造の同質性が偏差によって掘り崩されるとするならば、メルロ＝ポンティ自身が『行動の構造』で打ち立てた物理的・生物的・人間的といった階層構造も、そのままのかたちでは維持されえない。我々はもはや「先行する構成の層を孤立した契機としては廃棄するが、それを保存し、統合もする」といった生硬な弁証法的表現にも頼るわけにはいかない。まだこうした表現は批判主義的な階層構造に依存したものだからだ。

この点に関してメルロ＝ポンティは、この表現にかえて「その場での乗り越え（dépassement sur place）」（S, 80）「側面的な乗り越え」（NA, 273）「逸脱を介した乗り越え」（NA, 276）「脱中心化」（RC, 136-137）「螺旋状の」発展（NA, 197）といったさまざまな空間的なイメージを提出している。いずれの場合にもメルロ＝ポンティは批判主義的な意識の歴史のモデルから脱却した、あらたな思考のモデルを練り上げようとしているのだ。

これらの表現、とりわけ「脱中心化」という表現を理解するには、『世界の散文』の「アルゴリズム」論における分析が示唆的である。メルロ＝ポンティはそこで次のように述べる。数学的な構造変化において重要なのは、「構造がみずからを脱中心化し、問いかけに開かれ、新たな意味に従って再組織化されることであるが、この意味はこの同じ構造の意味なのだ」、と。[11]

既成の構造に新たな偏差としての意味が出現し、新たな構造への要請が「問いかけ」として生じると、この（いまだ存在していない）構造は、この新たな意味を手がかりに、みずから既成の構造を取り上げ直し、古い構造の諸要素を脱中心化すると同時に新たな中心化をおこなうことによって、古い要素の「間」におのれの領域を画定する。本質的なのはこの脱中心化と再中心化の二重の運動であり、構造が後ずさりしてみずからを取り上げ直す「ざりがにのごとき歩み」なのだ。[12]到来しつつある構造は、いわば螺旋状におのれの過去、すなわち古い構造の諸要素に遡行することによって、おのれを制度化する。数学的な領域においても「真理は十全性ではなく、予期、取り上げ直し、意味のすべりであり、ある種の距離においてのみ己に触れる」。[13]偏差とはこの「距離」を空間的に表現したものだと言えるかもしれない。それは構造がいわばおのれの上に折れ重なるときに生じる時空間の歪みのようなものと考えられる。

新たな構造は、諸要素の間において、それらをトポロジカルに裁ち直すはずのものとして到来するのであって、その多数性を廃棄しはしない（cf. RC, 174, NA, 268）。そしてこの「意味の生成」においては、外的な理念が介在する余地はない。これこそ「おのれに成ること」「意味になること」[14]という、ゲシュタルトの「生まれつつある知解可能性」にほかならないであろう。この意味の自己生成が理念的意味を基礎づけると同時に反省的な取り上げ直しを促し、おのれの作動を忘却させる。批判主義的な反省は、この忘却の結果生じた構造から出発し、発生した意味を過去の構造に据えつけることによって、真理の超時間的な先在を語る。言うなれば批判主義的な反省とは、偏差の自己忘却の忘却によって

自己を基礎づけるのだ。

このようにメルロ＝ポンティは、『行動の構造』で語った「理念の世界における出来事」を構造に内的に結びつけようとする。こうして我々の前には、いかなる階層性ももたない「諸布置の建築物」（VI, 281）という「スペクタクル」が繰り広げられていく。「すでに構成されてしまっている」と同時に「けっして構成されてしまわない」ものでもある世界の Stiftung は、もはやたんなる否定の連鎖として語られるのではなく、それにふさわしい存在論的な地位を与えられることになる。「存在」と呼ばれるものは、このような偏差に内的に織りなされた、ある潜在的な総体のことなのであるが、その潜在性はもはや神秘的な可能性の貯蔵庫ではなく、ある新たな構造が到来するときに、部分的・事後的・間接的に垣間見られる潜在性のことと考えられなければなるまい。

こうして『行動の構造』が批判主義的な分析の「残滓」として主題化した開け＝出来事＝制度化は、新たな存在論の端緒に据え付けられるのである。

付記　本稿は日本メルロ＝ポンティサークル第四回大会シンポジウムでの発表原稿「否定的原理としての生」をもとに、他の発表者との貴重な議論をふまえ、全面的に改稿したものである。この場を借りて当日の発表者加國尚志氏、伊藤泰夫氏、ならびに司会の松葉祥一氏に深く感謝したい。本稿ではとりわけ「否定性」の問題は背景に退いている。なお本稿の執筆にあたっては平成九、十年度文部省科学研究費奨励研究（A）（二十世紀初頭フランスにおける情報・メディアと社会・思想の相関に関する総合的研究）の援助を受けた。

またメルロ＝ポンティの主要作品を引用するにあたっては以下の略号を使用する。

NA : *La Nature* (notes, Cours du Collège de France), établi et annoté par D. Séglard, Seuil, 1995.

RC : *Résumés de cours* (Collège de France 1952-1960), Tel/Gallimard, 1968.

SC : *La Structure du comportement*, 8e édition, Presses Universitaires de France, 1977.

PP : *Phénoménologie de la perception*, Tel/Gallimard, 1945.

VI : *Le visible et l'invisible*, Tel/Gallimard, 1964.

S : *Signes*, Gallimard, 1960.

註

(1) RC, 129-137, 171-177, NA, 169 et sq. NA の文献学的問題については、拙稿「舟なき航跡としての生――メルロ＝ポンティにおける生命科学」、筑波大学『言語・文化論集』、一九九七年、四五号、十五頁にまとめておいた。

(2) われわれは別のところでこの数頁を詳細に分析し、とりわけカッシーラーの哲学との比較対照をおこなった。*Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Merleau-Ponty*, thèse de Doctorat soutenue en 1994, Université de Paris I (inédit) .

(3) 「構造」と「意味（signification）」の関係の問題は、PP, 491 で取り上げ直されて最終的な解決をみるが、この問題には立ち入ることはできない。

(4) 上記の引用での「制度化」という用語の使用はけっして偶然ではない。なぜなら一九五二年にゲルーに提出された報告においても同様の用法が見られるからだ。「上位の行動は有機体の生に新たな意味を付与する。しかし精神はここでは監視された自由しか用いることはできない。精神が持続的な制度として安定し、自己を実現するためには、より単純な活動を必要とするのだ」（« Un inédit de Maurice Merleau-Ponty », *Revue de Métaphysique et de Morale*, n° 4, 1962, p. 403.

(5) ただしメルロ＝ポンティ自身も『知覚の現象学』で、意識は「自然への受肉と歴史的状況の少なくとも可能性」ははらんでい

る、と記しており、知覚によって歴史的状況そのものを説明し尽くしてしまえると考えていたわけではない（PP, VII）。

(6) 前出拙稿「舟なき航跡としての生」参照。

(7) 「個体化の作用」はジルベール・シモンドン（Gilbert Simondon）の用語。この点に関しては拙稿「技術的対象の現象学」東京大学教養学部『外国語科研究紀要』四三巻第二号、一九九五年、二五～四五頁を参照いただければ幸いである。

(8) たとえばユクスキュルが記述した環境 Umwelt 理論は、「生とは行為の領野の開け」として理解すべきことを明らかにした（NA, 227）。「生という『特異点』においては（……）Umwelt はもはや己自身にたいして隠されてはいない。」

(9) われわれは別のところでフーコー権力論における偏差の概念の重要性に注目し、権力を制度における自己規範化の作用としてとらえ、権力論を歴史の存在論へと練り上げる可能性について論じた。「分身の系譜学と権力のテクノロジー――フーコー『監獄の誕生』の哲学的意義」、筑波大学『言語・文化論集』、一九九八年、四八号。

(10) VI, 127, 140. discernement はベルグソンの用語。Cf. *Matière et mémoire, Œuvres*, Presses Universitaires de France, p. 188. Cf. aussi, NA, 85.

(11) Cf. *La Prose du monde*, Gallimard/Tel, 1969, p. 178. またある註では「軸としての存在の非構成的な合理性」は「脱中心化を意味の土台として持つ」と記されている（p. 63, note）。だがこの註やアルゴリズムに関する章は「間接的言語と沈黙の声」には取り入れられなかった。逆説的なことに、数学的な理念性の分析が、自然の概念の再考を迫ったのだと推測することもできよう。

(12) *Ibid.*, p. 214.

(13) *Ibid.*, p. 181.

(14) *Ibid.*, p. 214.

偶然に揺れ動く目的論

――カント『判断力批判』の解釈をめぐって――

加國尚志

「その〈野蛮さ〉からして、野生の精神は本質的に無起源的（an-archique）で非目的論的（a-téléologique）なものではなかろうか？」―Marc Richir, *Communauté, société et histoire.*

1　どうしてカント（目的論的判断力）ではなかったのか？

『自然』講義の一九五六―五七年度（N.113まで）は自然概念の変遷史となっており、近代の「対象の存在論」（N.169）の形成過程とその変遷を扱っている。シェリングは根源的な盲目の産出性について語ったが、それはすでにライプニッツが表出の概念で述べたものであり（N.64）、またベルクソンは生命の問題に、カントが見て取れなかった根源的な偶然性をもった歴史性を見て取ったのだが、それはシェリングの堕落の歴史と似ている、とされている（N.87-94）。「大地」について語った後期フッサールは超越論的哲学と自然の問題においてシェリングと同じ問題意識に立つことになる